

日本占領を再考する

さっこん
昨今のイラク、アフガニスタンにおける米軍占領は、日本占領に対する新たな関心を呼び起こしました。それは、研究者や政策決定者がグローバルな問題を理解するためのよりよい方法をさがしもとめるようになったからであり、そしてまた、とりわけジョン・ダワーの『敗北を抱きしめて』によって、日本占領という研究分野がすでに活発になっていたからでした。多くのアメリカ人が、その政治的立場に関わらず、以前よりもずっとアメリカを帝国権力として捉えるようになりました。同時に、研究者もまた、日本帝国の拡張と、その後の植民地の喪失を、20世紀中頃に他の地域で起きていたことと同等のものとして捉えるようになってきました。そういった地域は、決して例外的ではなく「普通の国家」でした。日本語による研究でも同様の傾向が見られます。ポストコロニアル研究は、比較研究という枠組みをもたらすと同時に、フラタニゼーション（占領者と被占領者の性的関係）といった占領経験に関わる新たな問題系を提示しました。一方で、合衆国の「新しい国際関係史」は占領を国際関係の中に位置づけるだけでなく、国外における合衆国の経験が国内のアメリカ人にどのような影響を与えたのか検討しています。こういった異なる研究方法を組み合わせることで、日本占領を特徴づけているトランスナショナルな関係性を、より複雑で横断するものとして描き出すことが可能になるでしょう。このような研究は、占領期をアメリカ史の中にしっかりと位置づけており、冷戦構造においてアジア太平洋地域の役割がどのようなものであったのか理解するための手がかりを与えてくれます。

しかしながら、こういった異なる歴史記述を関連づける作業には危険もひそんでいます。第一に、他のどこよりも合衆国において顕著なのですが、アメリカ史の枠組みが、それが国内についてのものであれ、世界におけるアメリカの影響についてのものであれ、しばしば他の地域に対する理解を方向づけてしまうのです。アイデンティティや“エイジェンシー（主体性）”といったアメリカ史において支配的な言説は、必ずしも国際的に通用するわけではありません。Walter Johnson は“On Agency”というすぐれた論文において、この概念は「独立と選択を保障された自己、というリベラルで普遍的な認識」を前提にしていると述べています。Johnson は、この自己という概念がアフリカ系アメリカ人奴隷の経験を理解しようとする人々を間違った方向に導くと述べていますが、これは、合衆国とは異なる文化的背景、例えば近代日本における人々の行動を理解するのもやっかいな概念と言えるでしょう。この点について、ジョンソンは次のように述べています。

歴史学者の用いる理論的枠組みとしての「主体性」は歴史的、文化的に位置づけられた抵抗の^{いとなみ}営みを、より漠然とした人間の能力の表れであるかのようにおとしめてしまう。結果として、奴隷化された人々がどのように彼ら自身の行動を理論化していったのか、そしてまたそのような行動が奴隷制や抵抗に関する思想にどのように貢献していったのかという重要な問題をあいまいにしてしまうのである。

「主体性」という枠組みや、「日常の抵抗」といった表現を追い求める背景には、歴史的主体は完全な自主性を欠いているからこそ、反乱を欲するという思い込みがあります。もちろん、この思い込みは理論的にいって問題があるわけで、なぜならば社会的制約から完全に自由な者、あるいはその状態を望む者はほとんどいないからです。Johnson は、さら

に、研究者も読者も、実際にはそうではないのに、自主性の欠如と自由を求める行動の相関関係について理解していると思込んでいると主張しています。抽象的な「抵抗」という概念は、本来の文脈から離れると、しばしば、その意味合いを失ってしまいます。例えば、圧政にふみにじられたアジアの人々が、少なくとも私の学生の手にかかる、あたかもこざかしいアメリカのティーンエイジャーのように聞こえてしまうのです。

第二に、ジョンソンが、アメリカの奴隷制という人種化された制度について言及していることは偶然ではありません。アメリカにおける人種関係と、それがアメリカのアイデンティティ構築に決定的な影響を与えてきた歴史は、アメリカ人の世界の見方を形作ってきました。なぜなら、アメリカと諸外国の関係性も、たいていが人種的なものだからです。二つの次元のアイデンティティについて同時に述べることは難しいですが、国家的なアイデンティティと個人としてのアイデンティティが共に呼び起こされる時、国家的なアイデンティティは、それが人種的なアイデンティティと融合していることもあって、より強調して語られます。たとえ研究者が、国家的アイデンティティを、階級化・人種化・ジェンダー化された個人のアイデンティティに分解して考えようとしても、アメリカ人と非アメリカ人の関係性に目を向けたとたん、そういった個々の差異は消えてしまうのです。

おそらく、人種についてのこういった理解はとりわけアメリカ人に関係することだと思いますが、ポストコロニアル研究の世界的な受容もまた、国家的アイデンティティを強化しています。「主体性」や「アイデンティティ」というやっかいな概念は帝国主義批判に通じますが、そういった批判の中にはフランツ・ファノンによる、被植民者としての経験によって刻み込まれた精神的な傷跡をめぐる研究を元にしたものがあります。ここで私たちは、ファノンが熱烈な国家主義者であり個々人と未来の国家の間に明確な線引き

をしようとしていたことを思い出す必要があるでしょう。Immanuel Wallerstein が 2009 年に発表した論文で言及しているように、『ファノンは、国家的な解放を求める政治的闘争の文脈に位置づけられないような文化的アイデンティティを主張する、いかなる企てに対しても非常に批判的』でした。「主体性」の追求と帝国主義批判は、その背後で国家的な解放という目的に結びついているために、日本占領において権力の座にあったアメリカ人の尊大さや人種主義に焦点をあてた研究はみな、占領が、日本の国家としてのアイデンティティに対する帝国主義的な攻撃であったという思い込みによって屈折したものとなっています。

日本占領の場合には、別の問題もあって、なぜなら日本はアメリカの実働部隊ではあっても、いわゆる典型的な植民地ではなかったからです。沖縄や韓国における米軍占領という、日本本土の占領とはまったく異なる占領についての新しい研究によって、日本の占領経験が占領のひな型であったかのような、また、日本占領を学ぶことでイラクやアフガニスタンにおけるアメリカの軍事占領の影響を予測できるかのような思い込みが危険であることが明らかになってきました。これらの地域は、いずれもアメリカの安全政策に従属していましたが、決して同じような状況にあったわけではないのです。さらに、主体性や独立の追求を統一された国家の目的として捉えてしまうと、占領におけるもっとも重要な側面を見逃してしまうでしょう。それは、占領下日本における最大の闘争は、それぞれ異なる日本の未来を思い描いた日本人たちの間で繰り広げられたということです。彼らは、ことあるごとに、あらゆる手段を用いてアメリカ人をそれぞれの闘争に引きこみましたが、それでも彼ら自身が掲げていたアジェンダを常に追い求めていました。彼らとアメリカ人との関係性は、対米協力や日常的な抵抗といった言葉では説明できません。なぜな

ら、アメリカ人が持っていた目的は、ここでは、より大きな物語の一部にすぎなかったからです。

アメリカの占領と日本の戦争：二つの帝国史

a) 帝国史としての米軍占領

それでは、新たな研究は、これまでの外交史の文献についてどのように述べているのでしょうか？多くのアメリカと日本の研究者は、^{こんにち}今日のアメリカの外交政策に対する失望から、占領を正当ではなかったものとして描いています。これは、英語で書かれた占領に関する初期の文献と非常に対照的であって、そういった文献の大部分は、SCAP（連合軍最高司令官総司令部）や、占領政府で働いていた人物によって書かれたものでした。このような古い文献は、今見て見ると、いやらしい自己満足で彩られており、途方もなく苛立たしく感じられます。対照的に、日本の研究者は、以前から合衆国の^{じこまんえつ}自己満足や、反民主主義的とも言える行いについて言及してきました。同時に、例えば“Inside GHQ”で知られる竹前栄治(Takemae Eiji)のような日本の専門家は、昭和憲法や女性参政権、言論・出版・集会の自由、神道と国家の分離、教育改革、土地改革、さらに新しい労働人権といった主要な占領改革は日本人の生活を大きく改善したために、占領期の歴史を理解する上で重要視する必要があると主張しています。

より最近の研究は、アメリカの占領がいかに尊大な帝國的事業であったのかについて焦点をあてています。あらゆる意味において、これらの研究はインドシナにおけるア

アメリカの戦争の過程で生み出された、とりわけ国家の暴力をめぐるかつての研究を呼びおこしますし、実際にそういった研究を前提としています。John Dower や Herbert Bix の、例えば Edward Friedman and Mark Selden' s *America' s Asia in 1971* といった著作における論考に、そのような傾向が見られます。彼らの分析は“Committee of Concerned Asian Scholars” や日本でもよく知られている、外交史の「ウィスコンシン学派」の影響を受けていますが、このグループはアメリカの外交政策が、巨大なアメリカ企業の国外における利益を守るために行われていたことを強調してきました。「ウィスコンシン学派」は、アメリカ資本主義に対するポストコロニアルな批判を予期していましたが、今日の研究者は、資本主義によって、いかに人々が人種あるいはジェンダーというカテゴリーに従って損なわれていくかには注目しても、資本主義が持つ、利益を蓄積し、工業労働者や自給自足農家への経済的な富の分配を最小化するメカニズムそのものに直接言及することはありません。

同様にして、ウィスコンシン学派はアメリカが利益追求することは、他国における抑圧的な政府を支持することにつながると述べてきました。このような議論は、占領に関する日本語研究においては、長いこと中心的な位置を占めてきましたが、そこでは日本を民主化するという初期の目的を放棄したアメリカ人をとがめるような主張がなされています。この流れの中で生み出された初期の英語による代表的な文献として、Mark Gayn' s *Japan Diary*, John Dower' s “*Empire and Aftermath*”, Joe Moore' s *Japanese Workers and the Struggle for Power*, Howard Schonberger' s *Aftermath of War*, 後にダワーの『敗北を抱きしめて』があげられます。このような著作を通して、英文読者は、合衆国が、その民主主義を喧伝する^{けんてん}という表向きの立場とは対照的に、天皇や政治的右翼、

そして強制的な資本主義を温存したということを知りました。彼らは、日本の歴史家とともに、占領を失われた機会という悲劇として描き出しており、そこでは、すでにキャロル・グラッグなどが指摘しているように、日本人が民主主義へと向かおうとしていたのにもかかわらず、日米のエリートによってそれが否定されたと認識されています。

日本占領を戦時期の日本によるアジア占領と比較するという、かつてはタブーであった試みを始めた研究者もいます。1985年に、袖井林二郎 (Sodei Rinjirō) が初めてこの問いを検討しており、Marlene Mayoもまた、1994年と95年に行われた二つの会議で同様の議論を繰り広げており、そのうちの 하나가、Tohmas Rimerとの編著として2001年に出版されています。それ以来、田仲利幸 (Tanaka Toshiyuki) は2002年に出版した軍事「慰安婦」に関する著作の中で、はっきりと二つの占領を比較しており、アジアにおける日本の戦時売春宿と占領下日本におけるアメリカ軍とオーストラリア軍を対象とした売春について論じています。より最近の研究としては、Tanaka and Marilyn Young *Bombing Civilians*があげられますが、同書は、米軍の日本への空爆と核投下は、中国における日本の空爆と同様に戦争犯罪であったとする率直な見解とともに始まります。彼らは、1940年代に日本とアメリカが行った軍事占領の間にいくつもの共通点を見いだしています。

B) 帝国主義としての日本の戦争

以上のような比較史的な理解は、日本の歴史家による戦争の再評価を前提にしています。彼らは、社会のもっとも残酷で、抑圧的な側面は、同時にもっとも近代的なもの

でもあると考えていますが、そのような見解は、占領経験を理解する上でも重要な手がかりとなるでしょう。仮に、戦時期の日本がすでに近代的であったとすれば、占領政権の改革者たちは、連合軍最高司令官のダグラス・マッカーサーが自らの任務について思い描いたような、日本人を封建的奴隷制度から解放する、などといったことはできなかったこととなります。日本の戦時史は1980年代初期に広く脚光をあびるようになりましたが、当時、研究者は「戦間期」に着目し、1930年代の発展を、1950年代、あるいは、さらに先まで持ち越されたものとして再認識するようになっていました。言い換えれば、彼らは、例えば武士道の侍精神のような、敗戦前から長く続いているとされる性質について分析していたわけではなく、むしろ1930年代に登場し、その後、戦時期および占領期に至るまで継続していったような政策や思想的な発展について検討していたのです。

さらに、1930年代および40年代の日本の諸制度は、ヨーロッパや北米のものと、そう違いはありませんでした。Gregory Kaszaは、*One World of Welfare*の中でこの点について述べていますし、Carola Heinもまた、都市計画について同様の議論を展開しています。Scott O' Bryanの*The Growth Idea*も、戦時から戦後へ経済的な概念がいかに継続していったのか、またそれがいかにヨーロッパやアメリカのものと類似していたのか強調しており、Hiromi Mizunoは科学に関して同じような主張をしています。

敗戦以前の日本を一般化しようとする試みは、その帝国主義的な活動にまで及んでいます。重要な発見として、帝国日本は、これまで考えられていたよりも、ずっと多文化であったということがあげられます。Louise Youngや、それに続く、Rana Mitter,

Mariko Tamanoi, Sven Saaler, Victor Koschmann, Barak Kushner, Todd Hnery, そして Emer O' Dwyer といった研究者が戦時期の日本の多文化主義や汎^{はん}アジア主義について、また植民地における日本人と被植民者の日常的な体験について研究しています。帝国について学ぶ他の研究者と同様に、彼らは、被植民者と植民者が共に成し遂げた貢献や及ぼした影響について、歴史資料においては、かなり控えめにしか描かれていないことに気付いています。

小熊英二 Oguma Eiji や “Perilous Memories” における Fujitani, White, Yoneyama は、日本が単一民族国家であるという考えの源流^{げんりゅう}が、戦前や戦中ではなく、戦後初期にあったことを明らかにしています。二つの著作が、帝国がその存続中に、日本の文化的創造力および政治経済の一部であったと述べています。さらに、帝国は日本のエリートや一般市民の中で広く受け入れられており、それは日本が軍国化するにつれ、アジア太平洋戦争も受け入れられていったのと同様でした。Ruoff と Atkins は、いずれも、日本で最も輝かしく、教育があつて、思慮深かった人々の多くが、それぞれの専門知識を喜んで帝国の発展のために使おうとしたことを明らかにしています。この点もまた、アメリカやイギリス、フランス、そして特にドイツやイタリアの経験と似ています。Ruoff は、日本が他の帝国よりもファシズム下のイタリアやナチス・ドイツ（彼自身は、「反動的近代主義」という言葉を用いていますが）に類似していたと述べており、一方 Atkins は、帝国間での共通点をあげています。しかし、いずれも、いかに日本の帝国が最も近代的な衝動や制度を背景にしていたのか、強調しています。Lori Watt は、引き揚げ者^{ひきあげしや}についての新しい著作において、日本を一度も離れたことのなかった日本人が、戦後、満州からの

みすばらしい引き揚げ者を前に、それまでに感じたことのない居心地の悪さを抱いたと述べています。彼らは、入植者の経験を、それがより多文化的であったことから、彼らに関係のないものとして、すぐさま否定したのでした。Wattが述べているように、このような、かつての植民者の経験を否認する戦後の風潮は、1950年代から60年代初頭にかけてアルジェリアを離れたフランス人を始めとする、他の引き揚げ者の経験にも共通するものです。新しく^{かくてい}画定された国境に自らのアイデンティティを合わせるのに忙しかった日本人やフランス人は、誰も、失敗した帝国の^{さんよ}試みの残余に思いを馳せようとは思わなかったのです。

以上述べてきたように、合衆国の歴史家は、以前よりずっと占領を問題のある帝国主義的な事業としてとらえるようになってきており、一方で、日本の歴史家は日本の戦争や、帝国の歴史を、近代ヨーロッパにおけるそれと、きわめて似通ったものとして見るようになってきたわけです。1945年のヨーロッパ人と同様に、戦時において三世代にわたって新しい地理的空間を征服した日本人は、どのように地域住民を帝都システムに組み入れるのか、懸命に考えていました。そのような努力は、数多くの知的・制度的な改革をもたらしましたが、しばしばそれらは極めて残酷でばかばかしい行動に結びつきました。日本のファシスト文化のダイナミズムを理解することは、ジョン・ダワーが『敗北を抱きしめて』において検討したような、なぜ日本人の大部分が戦時体制に参加していったのか、その後、なぜ戦争体験についてアンビバレントで不明瞭な態度でいるのかという問いを考えるための足がかりとなるでしょう。さらに、ヨーロッパ、日本、そしてアメリカの他地域における支配体制に共通する力学を見いだすことで、冷戦の歴史が、アメリカとソヴィエトの対

立構造であったというよりも、むしろ、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカそして中東における反植民地主義運動をめぐるものであったということが明らかになってきました。

c) 帝国下の親密な遭遇

この「親密な遭遇」 (Intimate Encounters) という枠組みを占領下日本にあてはめてみると、何がわかるのでしょうか？ 日本占領に関する最新の研究の多くは、アメリカ人と日本人の直接的で個人的な関係性に焦点をあてています。公的な交流については、長年変わらない研究テーマの一つですが、一方で、今日では非国家の行為者が中心的な位置をしめるようになってきました。そういった研究は、[Mary Louise Pratt](#) の言う帝国の経験における「接触地帯」 (“zone of contact”) という概念に影響を受け、彼らの関係性は、以前考えられていたよりも、ずっと親密で、文化的であり、相互に依存するものであったと考えられるようになりました。このような研究は、政策決定者だけではなく、占領に関わっていた普通の人々の内的な生活（およびその主体性）を明らかにしようとしています。特に、多くの研究者が、こういった日常的な交流に、人種とジェンダーがどのように関連していたのか、考えるようになってきました。

歴史学者の小代有希子 [Koshiro Yukiko](#) は、軍事占領において、人種概念が日本人にどのような影響を与えたのか研究しており、松田武 [Matsuda Takeshi](#) は、日本におけるアメリカの「ソフトパワー」に関する最近の著作で、ファノン^{えんよう}を援用しながら、戦後の日本人エリートが抱いていた劣等感について述べています。同様に、文学研究者のマイケル・モラスキー [Michael Molasky](#) は、日本人男性が、植民地化された無力感を表現するために、い

かに、米兵によりそう日本人娼婦を目にする不快感について、しつこく書き記しているか、明らかにしています。モラスキーの他にも、売春やフラタニゼーション、基地文化に焦点をあてた研究は数多く存在します。Cynthia Enloeによる東南アジアでの地元女性と米兵との関係性についての研究や、Katherine Moonによる韓国における同様の研究に触発されて、近年の著作のいくつかは、日本占領における売春の重要性を指摘しています。

Koikari Mire の*Pedagogy of Democracy*や、プリンストン大学のHolly Sandersとコロンビア大学のSarah Kovnerの博士論文は、売春婦自身の自己実現について言及するために、彼女たちにとって、売春制度がいかに抑圧的であったかだけでなく、その制度を彼女たちが、いかにうまく利用したかについても明らかにしており、EnloeやMoonによる先駆的研究にならった研究といえるでしょう。このような研究は、占領下日本における性労働の実態に焦点をあてることで、いかに日米政府が協力して、豊富で安価な性を米兵が享受^{きょうじゅ}できるようにしていたのか、またその性を提供する女性を管理していたかを明らかにしています。

こういった研究者は、売春婦について研究することで、いかに、無力な人々が、たとえピラミッドの底辺に囚われている時でも、それぞれのやり方で、自信をもった生き方をしていたのか知ることになります。このことを目的とする彼女らの研究は、なぜ日本人の雇用者が女性に十分な給料を支払うことのできる職を提供しないかといったような、日本社会内部における分離をあぶりだすと思われる方もいるでしょう。しかし、皮肉なことに、意図せずして、こういった研究は、個人のアイデンティティを探求することをのぞみながらも、かえって国家としてのアイデンティティを強化してしまうのです。それは、

歴史において大きな物語が持つ力の強さゆえ、と言えるでしょう。国家の不名誉の象徴としての売春は、読者と深く共鳴し、モラスキーが検討した男性知識人がそうであったように、女性に対する配慮を抑圧してしまうのです。ダワーの『敗北を抱きしめて』を教えていると、学生が、アメリカ人が日本の文化をダメにしたと決めてかかっていることに気が付きます。このような結論は、たいてい、日本の子供達が、娼婦とG Iのマネをして遊んでいる写真から導かれます。学生達は、この写真をアメリカ人が恥ずべき、人種的な退廃という一つの国家的な経験の証拠として、また占領を非合法化させるものとして見ているのです。

d) 国際史のアメリカ（ホーム）への環流

フラタニゼーションや売春といったテーマが日本のナショナリズムを強化してしまふのは、一つには、「接触地帯」として占領下日本を捉えることで、その接触の影響が日本人とアメリカ人に同等にもたらせたかのような印象を与えるからです。合衆国の新しい研究は三つの結論を導き出しています。第一に、このような国際的な関与は、アメリカの国家的アイデンティティを強く形作ったということ。第二に、アメリカの国境は一般的に考えられているよりもずっと、あいまいなものであるということ。さらに、そういった接触は、国家によって行われる人種主義的な暴力に特徴づけられているということです。

最近の研究では、[Scott Rohrer](#) が、占領に関与することで、いかにアメリカ人兵士が寛大な家父長であり自由主義者として自己イメージを形成するののかについて述べていますし、[Michael Cullen Green](#) は、占領によって、アフリカ系アメリカ人が人種化されたアメ

リカ人としてのアイデンティティを再認識していく過程に焦点をあてています。両者が明らかにしているように、占領下日本は合衆国南部のように機能していました。アメリカ人士官が売春宿を含む特定の地域を指定し、ある地域は白人兵に、他の地域は黒人兵にあてがうことで、アメリカにおける人種隔離を日本に持ち込んでいたのです。それに引き続いて行われた、どのようにアジア人を合衆国の人種秩序に組み入れるかという議論によって、新しく可視化された人種的な指標が作られ、アメリカ人の自己認識が変わっていきました。

重要なのは、以上のような著者が、ハワイにおける第二次大戦の影響を書いた [Beth Bailey and David Farber *The First Strange Place*](#) と似たような議論を繰り広げているということです。この太平洋上のアメリカの領土によって、太平洋という舞台でこれから繰り広げられる闘いに向かっていた大部分の兵士は、アジアとは何かを知りましたし、本土のアメリカ文化もハワイについて知りました。真珠湾攻撃以降、ハワイは軍事規律下に置かれ、ハワイの人々は、日本人がそれから五年後に経験することになるような、南部的な人種主義を経験したのです。 [Naoko Shibusawa](#) は、最近の著作で、どのようにアメリカ人の日本人に対する認識が、1950年代の人種およびジェンダー観念によって形作られたのかについて考察していますが、彼女はアメリカの国内史の似たような側面と日米関係を関連づけています。

チャルマーズ・ジョンソン([Chalmers Johnson](#))の2000年から2006年にかけての、『アメリカ帝国の悲劇 ([The Sorrows of Empire](#))』を始めとする三部作は、沖縄でジョンソンが行った調査を元にしてしていますが、アメリカの戦後外交史は、冷戦中もそれ以後についても、世界各地に存在する『軍事基地の帝国』に着目することで、最もよく理解できると論じています。 [Bruce Cumings](#) は2009年の“[Dominion from Sea to Sea](#)”でこの主張をさら

に発展させています。さらに、より一般的な帝国の「接触地帯」を考えるために、アメリカ人の歴史家は現在、こういった著作を、[James Merrell's *The Indian's New World*](#), [Ned Blackhawk's *Violence over the land*](#), そして、当時イギリス領であったトリニダードにおける米兵に関する [Harvey Neptune](#) による研究とあわせて読んでいます。こういった研究はいずれも、国境の位置を問題視し、人種主義的なアメリカ人の暴力に焦点をあて、文化交流が決して一方通行ではなかったことを明らかにしています。こういった研究の積み重ねによって、アメリカの国内的な人種関係と国外での活動が、相互に依存する現象であったことがわかってきました。

[Catherine Lutz](#) の連作、[Homefront](#) と [Bases of Empire](#) は、こういった議論の流れから、アメリカ史と他地域における歴史を統合するという非常に重要で、説得力のある議論を導きだしています。Lutz は、米軍占領と軍事基地を国境や歴史を分断・横断するものとしてだけでなく、合衆国の大陸自体を巻き込む現象としてとらえています。彼女は、ノース・キャロライナにおける軍事基地の町が、日本の横須賀^{よこすか}や沖縄の宜野湾^{ぎのわん}に非常に似ていると指摘しており、アジアにおける米軍基地の研究が明らかにしているような、性や暴力、市民の地位の低下といった問題がアメリカでも起きていると述べています。重要なことに、基地に憤りながらも、依存した生活を送るノース・キャロライナの住民はもはや人種的なマイノリティだけではないのです。アメリカ人兵士が、国外において地元の住民を虐待するのは、一つにはその住民を人種的に蔑視しているからといえますが、そのようにして経験された行為は今や、人種にかかわらず、すべての市民に向けられたものとなっています。

以上のような研究はアメリカについての二つの議論を明らかにしています。一つには一般的に考えられているよりもずっと、アメリカのアイデンティティは、軍事的暴力を核にして構築されているということ。そして、国外において、そのような暴力によって生み出され、強化されてきた人種的、階級的、ジェンダー的なヒエラルキーは、時に、ホームであるアメリカにおいて、アメリカ人の慣習の基本となるということです。このような分析はまた、軍国主義体制下では、すべての市民の生活が損なわれているという主張のもとに、戦時日本と戦後アメリカの軍国主義文化を連続したものとして捉えています。ジョン・ダワーの最新の著作 *Culture of War* は、詳細にわたって、両者を比較しており、1940年代の日本の戦争と今日のイラクおよびアフガニスタンにおけるアメリカの戦争を明確に関連づけています。

トランスナショナルな構造の一部としての日本占領 — 冷戦

ポストコロニアル研究がアメリカの日本に対する^{はげん}覇権を強調する一方で、新しい国際関係史では、日本占領がアメリカを優位とする戦後の地域体制の中でも、とりわけ恵まれた位置にあったことを明らかにしています。日本の幸運は、沖縄や韓国、台湾という、1945年初頭の段階では、日本の支配下にあった地域の経験と比較した時に、より明白です。実際に、日本の戦時政策とアメリカの戦後政策は、驚くほど連続しており、時に共犯的ですらあります。竹前英治 (Takemae Eiji) は、天皇個人を含め政府が、1952年に日本の主権と引きかえに、沖縄を完全な軍事植民地としてアメリカに差し出すことに同意したことを明らかにしました。沖縄のこの地位は、1972年まで続き、現在も依然^{いぜん}として、政府（とア

メリカ)の同意のもとに、巨大な米軍基地をかかえています、日本政府はこの負担を是正する気はないようです。こういった著作や、[Matthew Allen](#), [Miyumi Tanji](#), [David Obermiller](#), [Gerald Figal](#)の研究、さらに、[Chalmers Johnson](#), [Hook](#), [Siddle Hein](#), [Selden](#)による3つの編著は、沖縄をめぐる日本とアメリカ支配の類似点だけではなく、連続性についても指摘しています。

同時に、ブルース・カミングスが、明確に示しているように、朝鮮におけるアメリカ人士官は組織的に、戦中に日本の植民地政府と関係の深かった人物を復帰させました。この事実を考慮に入れると、1945年以来の北朝鮮の行動は、はるかに道理にかなったものとして見えてきます。数十年前に、[William Borden](#) と [Michael Schaller](#) は、アメリカの政策担当者が東南アジアの利益よりも日本の利益を優先したこと、そして日本を援助するというのが、アメリカがベトナムで闘った一つの要因であったと証明しました。[Seth Jacobs](#) や、[Bradley R. Simpson](#) などによる、東南アジアにおける戦後のアメリカ政策についての、より最近の研究は、いかに人種主義が、アジア人に対する民主主義を否定するというアメリカの態度を下支えしたかを明らかにしていますが、そういった研究からも日本のケースが特別であったことが伺えます。

[Mark Caprio](#) は、占領下日本のアメリカ人が、しばしば、日本人が持つアジアの他の人々に対する差別感情を共有していたことを明らかにしています。アメリカの政策者は、日本にいる朝鮮人が非常に高い確率で犯罪者であり共産主義者であるという日本の官僚の見解を、驚くほど無批判に受け入れていました。その結果、日米両国の政府は手に手をとって朝鮮人の行動を制限し、できるだけ多くの朝鮮人を北朝鮮へと送還したのでした。また、アメリカと日本は、日本経済だけではなく、1950年に勃発した朝鮮戦争を引き金に

して、軍隊の再建にも協力するようになりました。このような研究は、売春に関する研究と同様に、いずれも戦時の帝国日本が戦後において拡張しつつあったアメリカの支配領域と重なり合い、一体化していったことを明らかにしており、日本が「典型的」なアメリカの従属者ではなく、むしろ戦後体制において例外的に特権的な参加者であったことに気付かせてくれます。

他に、戦後に画定された新しい国境が実際の人々の行動をとらえ損なっていると主張する研究もあります。テッサ・モーリス＝スズキ Tessa Morris=Suzuki は、戦後の日本に出入りした、公的な記録には残されていない多くの朝鮮人についてなど、東アジアのトランスナショナルな歴史に関する著作を書き続けています。1945年に国境線が新しくひかれても、彼らの生活は変わりませんでした。つまり、たとえ彼らが、例えば、大阪にある我が家から、ソウルに住む母親に会い行くといった、以前と同じ行動をとったとしても、そのような行動は戦後においてはまったく違った意味を持つようになったわけです。「合法」の渡航がほとんど許されなかった占領期において、日本は、今日考えられているほど、アジアから孤立していたわけではないと、モーリス＝スズキは説得力をもって示しています。帝国日本の地政学的な論理が効力を失っても、帝国の崩壊を喜んで見ていた人々でさえ、帝国がいまだに存続しているかのようにふるまい続けました。彼らは、今やアメリカ主導となった地域秩序において、それぞれの必要性を満たす方法を探っていたのです。

トランスナショナルなテーマを扱った沖縄の研究では、[Johnson](#)による1999年の編著における[Gavan McCormic](#)の論考のように、占領が環境に与える影響について指摘している研究があり、いかに日米の安全保障政策が沖縄の生態系を破壊したかを示しています。とりわけ沖縄についての論考が豊富なウェブ・ジャーナルである [The Asia-Pacific](#)

Journal は、Sakurai Kunitoshi の”Okinawan Bases, the United States and Environmental Destruction,” and Yoshikawa Hideki Dugong Swimming in Uncharted Waters”など、こういったテーマの宝庫です。個人的には、今後、このような議論が沖縄を超えて展開されることを期待しています。

日本を保護し再建しようとしたアメリカの取り組みを見ていくと、なぜ第二次世界大戦の記憶がアジアではいまだに、根深く軋轢^{あつれき}を生むものであるのか、よくわかります。その点については、たとえば、Selden and Hein in *Censoring History* Franziska Seraphim の *War Memory and Social Politics in Japan*, Sheila Miyoshi Jager and Rana Mitter in *Ruptured Histories* が論じています。アメリカの冷戦政策が地域に与えた影響を考慮に入れることで、なぜ日本が公的に謝罪することを避け、国際的な体制に注意を払うのか、そのことによって、ヨーロッパにおけるドイツがそうであるよりもずっと、日本にとって謝罪することが難しく、価値のないことになっているのか、もっとよくわかるでしょう。

実際、戦争の想起をめぐる議論は 1945 年にはすでに始まっており、最初から国際的なだけでなく多面的なものでした。東京裁判によって、南京大虐殺^{なんきんだいぎやくさつ}といった、それまでは検閲されていた事柄が国民の目に明らかとなり、戦争を記憶する様々な方法が生み出されていきました。Kei Ushimura *Beyond the Judgment of Civilization* は、裁判を通して、日本人と連合軍がどのように影響を与え合ったのかを手際よく示しています。彼は、『ビルマの豎琴』で知られる竹山道雄と、東京裁判のオランダ判事、バーナード・ローリングとの交流について描いています。1946 年に書かれながら、51 年まで発表されることのないエッセイで、竹山は、「現代文明」は連合軍の公式の立場である「訴追者^{そついしや}」ではな

く被告人なのではないかと論じています。『ジキル博士とハイド氏』に言及しながら、竹山は、日本の悪しき行いは、封建的で無知蒙昧なことに由来するのではなく、近代的な組織と宣伝技術の使用によってもたらされたと述べています。暗に、裁判席に座っている国々もまた、それぞれの近代的な「ハイド氏」の側面を持っており、それゆえ、戦争責任があるとしているのです。全く同じ論理から、ローリング判事は大半の判事の判断からは距離を置き、28人の被告人のうち5人は無罪であるとしながら、死刑を免れた3人が死刑に値すると助言しました。Yuma Totaniが*The Tokyo War Crimes Trial* で指摘しているように、1948年以降も、この裁判は、日本人にとっても、また欧米人にとっても、重要な記憶の場所として機能し続けています。同様に、Andrew Rotterは、*Hiroshima: The World's Bomb*において、原子爆弾の開発、使用、および記憶に関する歴史的な言説を、日米関係やいずれかの場所の国内史としてではなく、国際的な歴史としてとらえ直しています。

1950年代の日本に関する他の研究は、合衆国が日本にもたらした影響を、帝国主義の概念によってではなく、冷戦構造における日本の位置という観点からとらえています。初期の著作としては、*Postwar Japan as History* の中のとりわけDowerやCumingsによる論考があり、*Japan's Cold War* におけるAnn Sherifは、1950年代に日本の小説家や画家が何をおおやけ公に表現することができるのかについてアメリカが課した制限に着目していますが、その多くは占領が終わった後にできたものでした。Lonny Carlieも、日本の労使関係が、直接的な占領よりも、むしろその後のアメリカの冷戦政策に影響を受けたことを明らかにしています。

日本占領のこのような側面は、第二次大戦期に関する他の研究と同様に、アジアの他の地域よりも、占領下ドイツを含む西ヨーロッパに多く見られます。Carlieは、1950年代の日本の労働運動が、ヨーロッパの各国がそうであったのと同じように国内外からプレッシャーを受けていたと結論づけています。そういった国々は、ヨーロッパの中でも互いに異なっているので、「西洋対東洋」という図式は適切ではないというのです。彼が扱っている例ではいずれも、組合運動が、最左翼の機能主義者によって、統一された立場をとりにくくなり、結局は、ヨーロッパにおいても日本においても多くの労働指導者の革新的な見解が影をひそめ、資本主義の崩壊ではなく、その改革が、目標になりかわっていききました。日本は、フランスやイギリス、ドイツよりも、平和と中立主義を優先しましたが、それは、朝鮮半島やベトナム、アジアの他の地域の血まみれた衝突に引きずり込まれるという不安から生じたものでした。ヨーロッパ人も、このような状況であったならば、同じように行動したでしょう。こういった研究は、冷戦構造、つまり合衆国主導の第二次大戦後の世界体制に関する分析に新しい活力を与えてきましたが、それらの多くは、アメリカとソ連の対立関係とはほとんど関係のないように見える問題に焦点をあてています。また、そういった研究は日本が特別な位置を占めている地域的な体制についても描き出しています。このような国際的な側面に目を向けることで、日本の戦争記憶についてと同様に、日本社会の諸制度についての我々の理論を再考する必要があるでしょう。特に、日本型の経済発展はアメリカの戦後政策の文脈の中で、はじめて理解することができるのです。

歴史主体と戦後日本の幻想

占領下の日本の国家アイデンティティの運命という問題に戻ると、1945年の敗北によって、日本人が自ら抱えていたあらゆる問題と格闘するようになり、国家的アイデンティティというマスターナラティブは、中でも主要な問題であったことを今一度、思い起こす必要があるでしょう。日本人は、あらゆる方法で、アメリカ人を論争にまきこもうとしましたが、日本人が主役をつとめるドラマで、アメリカ人の役割はほんのわずかなものでした。

最も重要な論争の一つは、戦争について戦略的に忘却する必要がありました。Mizuno の戦時中の科学に関する研究は、この点を明らかにしています。彼女は、戦前の政府官僚、左翼思想家、ポピュラー・サイエンスの教育者という、科学についてそれぞれ異なる見解を持つ3つのグループについて検討しています。官僚は専門家の権力を強めたいと考えており、左翼は科学を社会改革のために利用したいと考え、教育者は、ラジオを組み立てるといった活動を通して、若い人々に、自然と科学の楽しさを伝えたいと考えていました。いずれの立場も、国家と戦争に奉仕する科学ナショナリズムを賞賛するために動員されたのです。

水野は、戦中の日本が反近代的で、非合理的であったという日本人にもアメリカ人にも広く信じられている戦後神話を批判しているだけではなく、なぜこの神話が主流になったのか明らかにしています。科学者は、彼らがいかに戦時体制に協力したのか自覚しており、また 1945 年以降も科学が日本を再建する中心的な役割を果たすことを望んでいたため、戦中の制度の非合理性を説き、その近代性について^{かえりみる}省みることをしなかったのです。J. Victor Koschmann, Doug Slaymaker, Andrew Barshayそして私が述べているように、日

本の思想家や社会学者も似たような立場をとりました。いいかえれば、第二次大戦を前近代的であったとする間違った認識は意図的な政治行動であり、戦争と敗北によってもたらされた日本の政治的な緊張を緩和^{かんわ}するためにとられた方策といえるでしょう。アメリカ人は、こういった議論に参加していましたが、日本人よりも戦時中の文脈や問題の評価についてわずかな知識しか持ち合わせていませんでした。

[James Brandon](#)は占領期における意図的な忘却は芸術や文化の分野でも起きていたことを明らかにしています。当初、それはアメリカ人をあざむくために生み出されたものでしたが、後に完全に日本人に受け入れられていきました。歌舞伎の指導者たちは、歌舞伎が戦争を美化したというSCAPの批判をおそれ、古典的な歌舞伎の形式は数十年変わっていないというウソの主張をしました。戦後に行われたこのような捏造^{ねつぞう}は、占領者に対処するための意図的な戦略でしたが、同時に日本人がそうであることを望んだ物語でもありました。だからこそ、その忘却が21世紀に至るまで続いているのでしょう。歌舞伎の擁護^{ようご}者は、アメリカによる干渉から舞台を守りましたが、結果として、現代文化への参与や芸術的なダイナミズムが減少するという代償も払いました。[Brian Victoria](#)も、禅宗について同様の主張をしています。一体、他にいくつの日本の文化が、戦中に時局の問題を扱っていたことを隠すために、占領期に古くさいものとなっていったのでしょうか？

ここで、個人の主体と、ナショナリズムとの関係性についてももう一度考えさせられます。しばしば、アメリカ人と日本人は他のアメリカ人と日本人のグループに対抗するために協力しあいました。例えば、私が研究した先進的な科学者や社会科学者は、似たような考えのアメリカ人と、驚くほど好意的に協力し、社会福祉の適格者についての新しい

ルールを作り、教育制度を改革し、製造業に対する品質管理し、エネルギー政策を考えだしました。他のグループは、先に述べたように、アメリカ人と協力し、沖縄を孤立させ、朝鮮人を抑圧し、性労働者を管理し、共産主義者を封じ込めようとしてきました。John Dower, Takashi Fujitani、Herbert Bixが明らかにしたように、同じような人々が、天皇裕仁ひろひと ほじを保持し、日本国家の中心に帝国の構造を温存させるための戦略を練っていました。キリスト教を日本社会に持ち込もうとした人たちもいました。こういった計画に従事していた日本人を従属的な協力者（あるいは抵抗者）として描くことはできないでしょう。なぜなら、彼らのプロジェクトは、それぞれアメリカ人と共有されていたものでしたが、いずれも日本人同士、互いに競い合っていたからです。こういった試みはいずれも、国家利益にとって中心的であったとも、破壊的であったとも評価することができます。アメリカの存在は、日本の権力構造に変化をもちましたが、その構造変化は戦争の経験や軍事的な敗北によってももたらされたものでした。敗戦という経験は、占領よりはるかに以前から始まり、占領期に再燃し、たいていは、その後も続いたようないくつもの論争をまきおこしのです。

こういった活動に従事した日本人個人を注意深く見る時、私は、彼らの持っていた自信とエネルギーに大変、感銘を受けます。だからこそ、くじかれた「主体」や植民地的なトラウマといった考え方に特有の、日本人はアメリカの帝国権力によって精神的に傷つき、彼ら自身の目標を見失ったという考え方が間違っていると感じるのです。アメリカの「ソフトパワー」に関する研究で、アメリカで訓練を受けた歴史家の松田は、フランツ・ファノンの植民地的意識についての古典と、主体性(agency)を探し求めるというアメリカの歴史学における伝統を組み合わせています。確かに、彼やモラスキーのいう、日本は占領によって深く傷つけられたという指摘は正しいのですが、私がよく知る人々は、松

田によって研究された人々にも近い存在ですが、それでもそのような反応をしているとは思えないのです。例えば、戦後、海外への渡航を許可された最初の日本人であり、傑出した経済学者であった大内兵衛は、1949年に合衆国とスイスを訪れた際の覚え書きを発表していますが、それらは皮肉があつて、おかしく、当惑もしており、興奮していますが、しかし決して傷ついたものではありませんでした。

思うに、大内は、ファノンが表現したような自己嫌悪（そしてカタルシスをもたらす暴力への欲望）には免疫があつたのではないのでしょうか。なぜなら、彼は、日本国家と自身を同一視することはなかったからです。松田や、そして私の学生が抱いているのは、自由や主権をもとめる（フロイト的な意味において）抑圧された国家の姿なのです。一方で、大内はナショナリズムに嫌気がさしていました。彼にとって、ナショナリズムや、それによって正当化された戦争は無意味な死であり破壊をもたらすものでした。アメリカ支配をナショナリズムによってのみ癒される心理的なダメージとしてとらえるのではなく、大内はナショナリズム自体を精神的^{せいしんてきびょうり}病理であると考えていました。ナショナリズムを嚴重に取り締まり、ナショナリズムの影響から彼の仲間を守りたいという気持ちが、アメリカに関してのどんな感情よりもずっと強く、大内を突き動かしていたのです。大内は、すべての日本人が、敗戦によってもたらされた政治的自由を享受すべきであると考えていました。1945年以降の日本において、その自由が意味するところは、それ以前とはまったく違うものだったのです。